2026年度、第3回「ウェルビーイングプロジェクト」外部評価委員会報告書

2026年6月23日（火）に外部評価委員会を開催し、8名の外部評価委員のうち6名が出席した。委員会開催後に各委員から得られたコメントの概略を報告する。また、下記①～⑥の項目について5点満点による外部評価を行ったので、併せて報告する。

①2023～2025年度プロジェクトの成果および本学研究力向上への貢献
②現行プロジェクトの目的・研究計画・研究体制の妥当性
③現行プロジェクトにおける各チームの研究体制および目的
④現行プロジェクトにおける若手研究者育成への取り組み
⑤現行プロジェクトにおける研究費支援制度の有効性
⑥現行プロジェクトによる本学研究力向上への貢献
⑦その他

（1）上記項目に関する各委員からのコメントの概略

①2023～2025年度プロジェクトの成果および本学研究力向上への貢献
【優れた点】
・これまでのプロジェクト(2023～2025)は、メンバーあたり5報近くの論文を報告しており十分な成果だと思う。

・研究部、研究センター、大学院が連携・一体となって取り組むという姿勢に感銘を受けました。研究を進めるには大学院生が必要ですが、入学者数も十分確保できていることは何よりで、さらに、若手サイエンスアカデミーにも参加できる体制としたことは高く評価できます。

・本プロジェクトは、2023～2025 年度において、全学的な研究推進体制の構築、学際的共同研究の促進、若手研究者育成、研究費支援制度の整備など、多方面にわたり着実な成果を挙げており、本学の研究力向上に大きく貢献したと評価できる。

・研究費の取得状況や研究費の採択状況はとても多く良好と思われます。

【検討が必要な点】
・歯科矯正学やオーラルメディシン・病院歯科学のように多数の大学院生が参加している講座もある一方、参加していない講座もあるようで、偏りがあり、大学全体での一体感が不足しているような印象を受けました。

・研究成果の評価指標については、Impact Factor（IF）のみに依存することには限界がある。分野間でIFの特性が異なることを踏まえると、Field-Weighted Citation Impact（FWCI）やTop 10%論文割合、被引用数など、複数の研究評価指標を組み合わせて評価することで、より公平かつ客観的な研究力評価が可能になると考える。

②現行プロジェクトの目的・研究計画・研究体制の妥当性

【優れた点】

・本プロジェクトの最も特筆すべき点は、次世代研究者の育成と橋渡しであると感じた。若手によるチームでのクラスター形成が自主的になされており、今後の発展が大きく羽ばたくことが予想される組織作りである。さらに、印象的だったのは、中堅教員もAIを活用した「今時の指導」に力を注いでいるという説明が心にとまった。絶えず、進歩しているプロジェクトであると実感した。

・2026～2028 年度計画においても、前期プロジェクトの成果を発展的に継承し、中堅研究者を中心とした新たな研究体制や重点研究支援制度を導入するなど、研究力の持続的向上を目指した計画となっており、研究目的・研究計画・研究体制はいずれも妥当であると判断した。

【検討が必要な点】

・社会実装について、たいへん重要だと思います。また、その前段階として、研究内容や成果を、同窓である一般開業医にもわかりやすく教えていただけると、こちらとしてもありがたいですし、研究者にとっても有意義だと思います。学会発表以外にも、各地域の同窓会や歯科医師会での講演などで、発表していただけるとおもしろいかと思います。

③現行プロジェクトにおける各チームの研究体制および目的

【優れた点】

・口腔デジタルサイエンスチームが主に取り組んで､他チームとの橋渡しもするというClinical AI に期待しています。今後、国の大型予算措置も期待できるので、後れを取らずに体力を蓄えることが肝要だと思います。国の予算だと、工学系ではPhysical AIであるように流行りの用語が使われます。医歯学系でもすでにマルチモーダルAI、AIエージェント医師、デジタルツイン医療などの流行りの用語もあるようですので（by ChatGPT)、東京歯科大オリジナルの用語（Clinical AI）だけでなく、シンプルに流行りに乗っかった対外発表もアピール力がある（他大学も同じ用語を使うので）と思います。論文だけでなく、学会講演会などで他大学に向けてストレートに実力をアピールしていただければ、将来の大型予算獲得につながり得る（審査員の記憶にとどまる）ものと期待します。

【検討が必要な点】

・低ホスファターゼ症に特化した研究は、本学の特色を生かした独創性の高いテーマであり、高く評価できる。一方で、今後の発展を考えると、患者リクルートや臨床検体の確保など、ヒトを対象とした研究へ円滑に展開できる体制についても示されると、社会実装への道筋がより明確になると考える。疾患特異的研究という強みを生かし、基礎研究から臨床研究へと橋渡しするトランスレーショナルリサーチの推進を期待したい。

④現行プロジェクトにおける若手研究者育成への取り組み

【優れた点】

・これまでに若手育成は十二分な成果もあげ、体制が完成しているので、これを継続しつつ、今期は中堅研究者強化に焦点を当てられた方向性に大いに賛同します。3 年間の年度目標を定めるやり方は、中堅研究者のリーダーにとっては、科研費申請書の練習にもなり、あるいは、大学院生に学位を取得させる指導の練習にもなり、意味はあると思うし、大学全体の中期計画の中で継続的な支援を考えてくださっているという片倉学長様のお言葉もいただきましたので、誰もやらない／思いつかないような斬新かつ革新的なテーマに挑む姿勢を忘れずにいてください。

【検討が必要な点】

・3 年間の年度目標を掲げて進めることが、目先にとらわれた研究になってしまうという悪い方向に向かうことなく、成果が期待できる sure なテーマと、そうでないチャレンジングなテーマをバランスよく進め、成果が出ないかもしれないテーマにも果敢に挑む姿勢を、各リーダーからメンバーに伝えていただければ有難く思います。

・中堅研究者向けの重点的研究支援制度について、研究展開部門、社会実装部門ともに 2 件ずつの予算を確保しつつも 1 件ずつの採択になったとのことで、何件の応募があったのかわかりませんが、今後の予算執行状況を見ながら、追加募集があってもよいのかな、という気はいたしました。

・中堅、若手を巻き込んでのプロジェクトですから特筆すべきです。ですが、それなりのリスクもあるかと思います。若手の方が、大学から退職等で研究から離れるかもしれません。人員の補充方法、継続方法等、バックアップも必要かもしれません。

⑤現行プロジェクトにおける研究費支援制度の有効性

【優れた点】

・研究費の取得状況や研究費の採択状況はとても多く良好と思われます。科研不採択の申請者に対する補助もとても良いと思いました。

【検討が必要な点】
・昨年度の科研費採択率が低下した要因については、単なる結果の分析に留まらず、原因を明確にしたうえでPDCAサイクルを回し、改善策を講じることが望まれる。例えば、研究内容によっては申請区分や審査分野を見直すことで採択可能性が向上するケースも考えられるため、戦略的な申請分野の検討や事前レビュー体制の強化にも期待したい。

・若手の優秀な先生方がいらっしゃるので、AMEDの若手枠やJSTの創発的研究支援など、大型の研究費でも比較的採択されやすい助成金に、積極的な応募を促進されては如何でしょうか。

⑥現行プロジェクトによる本学研究力向上への貢献
【優れた点】
・本プロジェクトは本学の研究基盤強化と若手研究者育成に大きく寄与しており、今後は研究成果の評価方法の高度化、外部資金獲得戦略の改善、ならびに特色ある研究シーズの臨床応用を一層推進することで、さらなる研究力向上が期待される。

【検討が必要な点】
特に無し

⑦その他
特に無し

（2）総括
本プロジェクトでは、「中堅・若手研究者の育成」と「世代交代」が明確な柱として位置付けられており、若手研究者の自主性を尊重したクラスター形成やチームづくりが着実に進められていることを高く評価した。また、研究費の支援に加え、若手研究者が継続的に研究活動を行える体制整備にも配慮されており、人材育成の観点からも優れた取り組みであると感じた。各チームリーダーからの発表では、東京歯科大学の研究の歴史や理念を踏まえながら、将来を見据えた研究の方向性が示されており、世代交代が円滑に進んでいることがうかがえた。本プロジェクトは、口腔科学研究センターを基盤として、基礎・臨床が連携した研究推進と次世代研究者の育成を目指す取り組みであり、その理念が研究活動や組織運営に十分反映されていることを確認した。委員長として継続的に評価に携わっているが、本プロジェクトは着実に発展しており、今後もさらなる研究の発展と人材育成の両面で大きな成果を挙げることを期待する。

（3）外部評価委員会開催後の上記項目①～⑥における数値による評価
評価は、上記6項目についてそれぞれ5段階で行われ、具体的なコメントが文章にて提示され

た。総合平均点は 4.94 であり、全ての項目で高い評価を得た。一方で、今後のさらなる発展に向けて、(1)IF だけでなく FWCI や被引用数など多面的な研究評価指標の導入、(2)大学全体での研究参画の促進、(3)研究成果の社会実装および積極的な情報発信、(4)大型外部資金獲得に向けた取り組みの強化、などの提言が示された。これらは、本プロジェクトの研究力をさらに向上させるための改善点として提示された。

評価項目	評価者1	評価者2	評価者3	評価者4	評価者5	評価者6	平均値
①2023～2025年度プロジェクトの成果および本学研究力向上への貢献	5	5	5	5	5	4	4.83
②現行プロジェクトの目的・研究計画・研究体制の妥当性	5	5	5	5	5	5	5
③現行プロジェクトにおける各チームの研究体制および目的	4	5	5	5	5	5	4.83
④現行プロジェクトにおける若手研究者育成への取り組み	5	5	5	5	5	5	5
⑤現行プロジェクトにおける研究費支援制度の有効性	5	5	5	5	5	5	5
⑥現行プロジェクトによる本学研究力向上への貢献	5	5	5	5	5	5	5
平均値	4.83	5	5	5	5	4.83	4.94

外部評価委員（五十音、敬称略）

上岡　　寛（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 歯科矯正学分野 教授）（委員長）
淺原　弘嗣（東京科学大学大学院医歯学総合研究科 医歯学系専攻 先端医療開発学講座
　　システム発生・再生医学 教授）
大島　勇人（新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻 顎顔面再建学 教授）
自見英治郎（九州大学歯学研究院附属 OBT 研究センター 教授）
高野　直樹（慶應義塾大学 理工学部 機械工学科 教授）
高橋　潤一（東京歯科大学同窓会 専務理事、東京歯科大学水道橋病院保存科 臨床准教授）
田中　芳彦（福岡歯科大学 口腔歯学部 感染生物学分野 教授）
美島　健二（昭和医科大学 歯学部 口腔病態診断科学講座 教授）